

セルフ・コントロールと先延ばし行動が大学生の適応感に及ぼす影響

岩田真奈

本研究の目的は、1先延ばし行動が学生生活適応感に及ぼす影響およびセルフ・コントロールとの関連を検討すること、2セルフ・コントロールと先延ばし行動が新型コロナウイルスによる学生生活の変化認知に及ぼす影響を検討することである。大学生・大学院生97名を対象に、セルフ・コントロール傾向・先延ばし傾向・学生生活適応感・新型コロナウイルスによる変化認知を測定し、分析を行った。1の結果より、課題先延ばし行動が学生生活適応感のうちの学業のつまずきを促すこと、また、改良型セルフ・コントロールは課題先延ばし行動を介して学業のつまずきへと影響を及ぼすことが明らかになった。2の結果より、改良型セルフ・コントロール傾向が高い人は、新型コロナウイルスによる変化に対してポジティブな認知する傾向があること、また、改良型セルフ・コントロールは課題先延ばし行動を介して学業のつまずきへと影響を及ぼすことが明らかになった。

自我消耗が二重過程理論の思考に及ぼす影響

奥山準也

本研究は、名古屋大学の学生62名を対象に自我消耗課題を実施し、自我消耗群、非自我消耗群の2つにわけ、熟慮処理方略課題を行い二重過程理論の思考におけるシステム1、2の優位性との関係を検討する。自我消耗課題では「ストループ課題」、熟慮思考方略課題では「CRT課題」を用いた。ストループ課題の平均解答速度、CRT課題の平均解答速度、平均正答率に対応のないt検定を行った結果どれも有意ではなかった。また、CRT課題の大問ごとの正答率に χ^2 乗検定を行った結果、有意差は見られなかった。以上のことから、本研究では自我消耗が二重過程理論の思考に影響を及ぼすことは示唆されなかった。本研究での問題として思考の連続性が検討された。またCRT課題でのシステムの利用において差を見つけれなかったため実験の際二重過程理論の使用はより精査され明らかにされていく必要がある。

大学生の援助要請スタイルに関する研究

—友人関係の取り方と抑うつとの関連から—

東 哲 史

本研究の目的は、大学生の援助要請スタイルが、友人関係の取り方と抑うつの高低との関連からどのような影響を受けるかについて検討することである。大学生287名を対象とし、「友人関係尺度」「援助要請スタイル尺度」「抑うつ尺度」で構成される質問紙調査を行なった。クラスター分析を行い、友人関係の特徴を「内面的友人関係群」「現代的友人関係群」に分類し、抑うつ得点から「抑うつ高群」と「抑うつ低群」に分類した。2要因分散分析を行なった結果、有意な交互作用は認められなかったが、それぞれの群に先行研究に準じた特徴的な援助要請スタイルに関する得点結果が得られた。また、各概念間にもそれぞれの相関が認められており、友人関係の取り方と抑うつの高低の関連が援助要請スタイルの取り方に影響を与えている可能性が示唆された。

ネットショッピングにおける努力の最小限化と衝動購買の関連についての検討

俵 宏 輔

衝動購買は様々な分野において注目されている。ある調査によれば市場における購買行動のうち、半数以上が衝動的に購入されている。これまで衝動購買について多くの要因からのアプローチがされているが、努力の最小限化との関連性を示した研究はほとんどない。オンラインで誰でも買い物ができるようになり、時間や移動、場所を問わず自分の欲しいものが簡単に手に入るようになった時代において、消費者にとっては比較する情報量が増し以前よりも衝動購買が生じやすい環境に変化した。このような背景から努力の最小限化が衝動購買の要因となっていると考え、両者の関連性の検討を行った。大学生、大学院生110名を対象に自己評価式の質問調査を行った結果、努力の最小限化と衝動的購買の間には関連性がみられなかった。一方、参加者が購入時において商品説明をしっかりと読んでいないことも示された。

青年期における過剰適応と抑うつとの関連

—自己認識に着目して—

内 木 麻優子

過剰適応とは過度に周囲の期待に応えることや自己抑制的になってバランスの取れた適応を通り過ぎてしまった状態のことを指す。過剰適応は外的・内的適応に大別される。青年期後期の人々に対し過剰な外的適応が自分らしくある感覚である本来感を低減させ、その内的不適応が抑うつ感に関連するというモデルを仮定し、その階層性と過剰適応が抑うつに及ぼす影響と性差について検討した。結果、仮定したモデルは適合度が十分でなく棄却されたが、下位尺度得点における t 検定、相関係数を行い、いくつかの有意な結果が得られた。また、統合的葛藤解決スキルと本来感に正の相関がみられ、本来感を担保するために有効な変数であることが分かった。階層性と過剰適応と抑うつとの関連を明らかにするためには内的適応の不全指標としてより明確に不適応を表すものを採用したり、より多面的に本来感をとらえることができる尺度を用いて再度検討する必要があると考える。

勝利時に再生される音声刺激がギャンブルの深追いに与える影響の検討

足 立 吉 規

本研究では、スロットマシン課題を使用し、勝利時に再生される音声刺激が喚起する覚醒の違いによるギャンブル行動、とりわけ深追い行動への影響を検討した。スロットマシンを一度行うごとに、主観的手法により快感情と覚醒の測定を行った。また、個人要因として問題賭博傾向と衝動性を測定した。本研究では、実験をオンラインで実施した。分散分析の結果、音声刺激の違いが深追い行動に与える影響は有意でなく、仮説は支持されなかった。感情状態および個人要因が深追い行動に与える影響を探索的に検討するため、重回帰分析を行った結果、忍耐欠如の負の効果、および快感情の負の効果が有意であった。本研究の結果から、音声刺激のみでの効果は大きくなく、視覚的刺激など、他の構造的要因の影響を考慮しての検討が必要であることが示唆された。

インタビュー場面における質問方法が話したい気持ちに与える影響

有 賀 夏 奈

本研究の目的は、初対面の相手と会話する場面としてインタビュー場をあげ、開かれた質問と閉ざされた質問を用いて、質問方法の違いによる話したい気持ちの変化を明らかにすることである。実験参加者を閉ざされた質問群、開かれた質問群、閉ざされた質問から開かれた質問への移行群の3群に分けてオンライン上でのインタビューを行い、インタビューの前後での話したい気持ちと自己開示への抵抗感の変化を調査した。その結果、閉ざされた質問群と移行群では話したい気持ちが高まり、開かれた質問群では話したい気持ちが低くなった。また、自己開示への抵抗感は全ての群で低くなったが、特に移行群において低くなった。以上より、質問方法の違いによってインタビューの話したい気持ちと自己開示への抵抗感に影響を与えることが示唆された。

キーワード：初対面・話したい気持ち・自己開示・質問方法

恋人に嘘をつかれたときの嘘の動機の認知と否定的感情が恋人に対する信頼感に及ぼす影響

金 田 直 之

本研究は、恋人に嘘をつかれたとき嘘の聞き手が認知する嘘の動機の違いが、否定的感情を媒介して恋人に対する信頼感に影響を及ぼすという仮説モデルを立て、これらの変数の関連について実証的検討を行うことを目的とした。予備調査にて作成したシナリオに基づき、本調査で大学生、大学院生132名に対して場面想定法を用いた質問紙調査を行なった。分析の結果、利己的な嘘の動機は否定的感情と正の関連、恋人に対する信頼感のポジティブな側面と負の関連、ネガティブな側面と正の関連を示し、利他的な嘘の動機はそれぞれの変数と正負が逆の関連を示した。また、仮説モデルについてのパス解析の結果、否定的感情の「攻撃・拒否感情」による間接効果がみられ、ブートストラップ法による検証の結果、その間接効果は統計的に有意であった。以上から、嘘の動機の認知の違いによって生じた否定的感情が恋人に対する信頼感に間接的に影響を与えていることが示された。

低自尊感情下における「見返し対処」の効果

—怒りは自尊感情上昇のために利用可能か—

岸 真 由

本研究は①別の要因により自尊感情が低下している状況における、怒り喚起や怒りへの対処方法（見返し・仕返し）による怒り感情や自尊感情の変化と、②自尊感情が低下している状況から怒り喚起および怒りへの対処が行われた場合と、何もせず一定の時間が経過した場合における怒り感情と自尊感情の変化を検討することを目的とした。大学生244名に場面想定法による質問紙調査を実施した。結果、別の要因により自尊感情が低下している状況においても、見返し対処に怒り低減と自尊感情上昇の有意な効果が認められた。また怒り喚起前と怒りへの対処後の2時点を比較すると、別の要因により自尊感情が低下した状況から「怒り喚起および見返し対処」を経ると、時間経過を待つよりも有意に自尊感情が上昇することが分かった。本結果から、自尊感情上昇をねらったアプローチの一つとして意図的に怒りを喚起し見返し対処をさせるという方法が有効である可能性が示唆された。

対人戦型オンラインゲームにおけるカタルシス効果

末 永 悠 希

暴力的なテレビゲームは人々の攻撃性を高め、攻撃行動を強化するとされてきた。一方で、ゲーム内で攻撃行動をとることで、ストレスなどを発散し、その後の攻撃行動を減少させる「カタルシス」効果の存在も指摘されている。本研究では、ゲーム内での攻撃行動によってカタルシスが得られると仮定し、さらに、欲求不満と攻撃行動は常に表裏一体の関係にあるという「欲求不満-攻撃仮説」を踏まえて、欲求不満、攻撃性、攻撃行動、カタルシスの4つの関係を説明するパスモデルを作成し、調査を実施した。また、できる限り攻撃行動を強化するために、調査参加者は対人戦型オンラインゲームのプレイヤーに限定した。分析の結果、カタルシス尺度に内的整合性が認められなかったため、カタルシスと各変数の関係は分からなかった。しかし他の変数に関しては、ゲームの暴力描写の有無に関わらず、欲求不満から攻撃性、攻撃性から攻撃行動へと有意な正の関係が見られた。

正のフィードバックがアルバイト学生のワークモチベーションに及ぼす影響

中 田 真由美

日本では数多くのワークモチベーションに関する研究が行われてきたが、正のフィードバックと認知的評価理論を組み合わせた研究は行われてこなかった。そのため、本研究では、自分がもらったと感じる正のフィードバック量が自己有能感を媒介して、自律性とともアルバイト学生のワークモチベーションにどのような影響を及ぼすかを認知的評価理論の観点から明らかにすることを目的とした。大学生237名に対して質問紙調査を行った。その結果、正のフィードバックは自己有能感を媒介してワークモチベーションに影響を及ぼし、自律性もワークモチベーションに影響を及ぼすことが明らかとなった。また、自己有能感の中でも特に精神的成長因子、チームワーク因子が大きな影響を与えていた。このことから、認知的評価理論はアルバイト学生の動機付けにおいても支持されたと考えられる。本調査の課題としては、適合度等の数値の低さやサンプルの偏りが挙げられる。

説明は人工知能への信頼を向上させ得るか

八 色 紀 彰

近年のAI（人工知能）はその発展が著しく、その性能は人間と同等程度かそれ以上と言われることもある。しかしその一方、AIの仕組みは複雑化しており、何を根拠に、そしてどのような過程を経て予測・判断をしているのかを説明できず、AIの判断に対する不安が残るという欠点が存在する。本研究の目的は、AI（人工知能）についての説明を提示することで、AIに対する信頼が向上するか、またどのような過程で信頼が向上するかを検討することである。実験の結果、提示される説明が多いほど理解度は向上したが、信頼は向上しないことが分かった。AIについての説明にはいろいろな内容が考えられるため、場面や状況に応じた適切な説明を提示しなければ信頼は高まらないということが考えられる。

在日ミャンマー人女性高度外国人材の職場適応とメンタルヘルス

戸 沢 理 奈

本研究では、日本で働く外国人労働者における職場への適応とメンタルヘルスの関係を明らかにすることを目的とした。調査対象を、日本に高度外国人材を多く輩出しているミャンマーの女性とした。外国人女性が日本で働く上で抱える問題に、職業性ストレスに加えて、日本人と働くストレスおよび女性として働くストレスを想定した。これらのストレスが職場への適応およびメンタルヘルスに与える影響を検討するとともに、職場において得られる上司・同僚支援、または企業による女性育成積極性によって、これらのストレスと職場適応およびメンタルヘルスとの関係にどのような効果を持つかを検討した。結果として、職場への適応によるメンタルヘルスへの促進的な効果が認められた。また、上司支援による顕著なストレス抑制効果に加え、企業における女性育成積極性の組織適応およびメンタルヘルス促進効果が認められた。

リハビリテーション運動における自己決定理論に基づく動機づけ支援

—デイケア施設利用者の自主運動に対する介入事例—

松 尾 陽 生

高齢化社会に伴い、高齢者の健康運動やリハビリテーションに向けた動機づけ支援が求められるようになっていく。そこで、本研究では自己決定理論 (Deci & Ryan, 2002) に注目し、これと関連がある短期動機づけ面接 (Rollnick, Heather, & Bell, 1992) を用いて、通所リハビリテーション利用者に対して動機づけ介入を行い、その影響を縦断的に調査した。【方法】対象者9名 (介入群: 7名, 対照群: 2名)。短期動機づけ面接による介入を行い、その前後の変化について、BREQ-2 (Markland & Tobin, 2004)、基本的心理欲求尺度 (大久保・長沼・青柳, 2003) と、半構造化面接による質的データを用いて検討を行った。【結果と考察】介入群7名中6名が目標とした運動を継続的に実行しており、介入の効果が認められた。しかし、BREQ-2や基本的心理欲求の各変数は5%水準で有意ではなかった。介入の有用性は認められたが、サンプルサイズの問題や、リハビリテーション現場に即した介入方法の検討など、更なる調査が必要である。

感謝特性がソーシャルサポートの知覚および主観的well-beingに与える影響についての検討

名 護 由 揮

先行研究によって、感謝特性は主観的well-being (主観的幸福感) の正の予測因子であることが示されている。本研究は、感謝特性と主観的well-beingとの関連をより明らかにするために、感謝特性を独立変数、主観的well-beingを従属変数、ソーシャルサポートの知覚を媒介変数とした媒介モデルについて検討を行った。ソーシャルサポートの知覚は、ソーシャルサポートを与える側を家族と友人に分け、また、ソーシャルサポートの種類を情緒的サポートと道具的サポートに分けた。大学生・大学院生を対象に質問紙調査を行い、112名を分析の対象として媒介分析を行った。その結果、(1)感謝特性は、友人からの情緒的サポートの知覚を説明し、友人からの情緒的サポートの知覚を媒介として、主観的well-beingと正の関連をもつこと(2)感謝特性から主観的well-beingに対する正の直接効果が有意であることが示された。

劣等感と自己の変容志向が精神的健康に与える影響 —大学生の対人関係に着目して—

飯 沼 あゆみ

大学生にとって対人関係は重要な領域であり、精神的健康に対して影響を与える要因である。本研究の目的は、対人関係についての劣等感とそれに対する自己の変容志向が、精神的健康にどのような影響を与えるのかを明らかにすることであった。大学生197名を対象として「友達づくりの下手さ」と「異性との付き合いの苦手さ」についての劣等感、自己の変容志向および精神的健康に関する調査への回答を求めた。その結果、「友達づくりの下手さ」においては劣等感が高いことが精神的健康度を低めることと、回避志向が高いことが精神的健康度を高めることが示された。また、「異性との付き合いの苦手さ」においては、回避志向が低いことが精神的健康度を低めることと、劣等感が高くても、受容志向が高いことで精神的健康度が高まることが示された。本研究では、対人関係における劣等感から意識をそらしたり受容したりすることが効果的な対処であることが示唆された。

セルフコンパッションと他者への罪悪感が謝罪・補償行動に与える影響

犬 飼 真里那

本研究は、罪悪感が謝罪・補償行動に与える影響をセルフコンパッション（SC）が調整する可能性を検討した。大学生50名を対象とし、実験室で同時に2名の参加者に認知課題を実施し、自分の成績が悪いために相手のみ追加報酬が減額される状況において謝罪の有無、補償課題に費やそうとする時間、SCを測定した。相手の追加報酬が0円と150円の条件を設け罪悪感の強さを操作したが、両条件で罪悪感に差は見られなかった。謝罪の有無を基準変数とするロジスティック回帰分析では、罪悪感の主効果のみ見られ、SCの主効果および罪悪感との交互作用は見られなかった。補償時間を基準変数とする重回帰分析では、罪悪感の高さが、SCの下位因子マインドフルネスの高い者では補償時間を増やし、低い者では補償時間を減らすという交互作用が見られた。マインドフルネスは、困難な状況を冷静に受け止めやすくすることで補償行動を促進することが示唆された。

両親間葛藤が青年の精神的健康に影響を及ぼすメカニズムの検討 —青年の自己分化に着目して—

小 森 桃 佳

本研究の目的は両親間葛藤が青年の精神的健康に悪影響を及ぼすメカニズムを検討することであった。両親間葛藤への巻き込まれ感に着目し、両親間葛藤が青年の精神的健康に与える影響は青年の自己分化の程度によって調整されると仮定し、自己分化による調整効果を検討した。現在両親と同居している、または過去1年間以内に両親と同居していた大学生・大学院生112名を対象に調査を実施した。階層的重回帰分析の結果、葛藤の解決の主効果が有意となり葛藤が解決されることが精神的健康に繋がること示された。また他者との融合を除いて自己分化の主効果が有意となり自己分化の高さが精神的健康に繋がること示された。両親間葛藤と自己分化の交互作用は見られなかった。本研究の結果から、両親間葛藤がもたらす子どもへの影響、ならびに自己分化と巻き込まれ感との関係について検討し、今後の研究への示唆を提示した。

フォーマルサポートがコーピングを介して自閉スペクトラム症児の親のストレスに及ぼす影響

後藤 梨華

ASD児の親は子育ての中で様々なストレスを抱えている。よって、ASD児の親のストレスを軽減するような支援の在り方を検討することには意義がある。本研究ではASD児の親を対象にフォーマルサポートの具体的なサポート内容に着目し、それぞれのサポート内容がコーピングを介してどのようにストレスに影響するのかを調査することを目的とした。特別支援学級や放課後等デイサービスなどに質問紙を配布し、ASD児の親36名とASD以外の障害を有する子どもの親12名から有効回答を得られた。本研究の目的を検討するため構造方程式モデリングを行った。その結果、回避・逃避型コーピングは直接的にストレスを増加させ、問題焦点型コーピングはフォーマルサポートともストレスとも関連がないという結果が得られた。さらに、フォーマルサポートは情動焦点型コーピングを促しストレスを低下させるという結果が得られ、一部ではあるが、フォーマルサポートの重要性が示唆された。

知識介入がうつ病に関する潜在的偏見に与える効果

柴田 凌輔

うつ病に対する否定的な認知や感情・行動を表す概念であるスティグマ、その中でも本研究ではうつ病罹患に対して非罹患者が抱く、潜在的なスティグマ的態度に着目した。本研究では、「どんな病前性格の人でもうつ病にかかる可能性がある」という知識を、文章という媒体を用いて介入したときに、潜在的なスティグマ的態度が減少するかを検討した。

測定するスティグマ的信念は「心が弱い」、「悪い」、「暗い」、の3つであった。測定に用いる尺度はSriram & Greenwald, (2009) の簡略版潜在連合テスト (BreifIAT) であった。

実験の結果、文章による「どんな病前性格の人でもうつ病にかかる可能性がある」という知識を文章で提示したとしても、スティグマ的信念が有意に減少したとは言えなかった。今後はサンプルサイズをより大きくし、「どんな病前性格の人でもうつ病にかかる可能性がある」という知識と「心が弱い」という信念との関連を詳細に考える必要があるということが示された。

大学生における居場所と過剰適応の関連

—個人的居場所と社会的居場所に着目して—

下野 紗矢香

本研究は、居場所と過剰適応の関連について、個人的居場所と社会的居場所に着目して検討することを目的とした。過剰適応が問題となりやすい青年期にあたる大学生を対象に質問紙調査を実施した。回答が得られた198名のうち、分析対象者167名に対して、過剰適応得点を目的変数、個人的居場所得点、社会的居場所得点、それらの交互作用項を説明変数とする重回帰分析を実施した。その結果、個人的居場所の主効果のみ示された。また過剰適応得点を内的側面と外的側面に分けて分析した結果、内的側面には社会的居場所の主効果、外的側面には個人的居場所の主効果が見られた。以上の結果から、社会的居場所と個人的居場所は、過剰適応を軽減する上で異なる役割を担う可能性が示唆され、両方の居場所を持つことでより適応的になると考えられた。今後の課題として、個人要因も踏まえた検討や居場所と過剰適応の因果関係の検討、居場所概念の明確化などが挙げられた。

自己有能感を介した職務複雑性とワークモチベーションの関連

高尾 彩

先行研究で、仕事が複雑であれば内発的ワークモチベーションは高まるということは示されてきたが、その調整変数については明確な結果が出されていなかった。本研究では働き方が変化する現代において、職務複雑性と内発的ワークモチベーションの相関とその相関への自己有能感の調整効果を明らかにすることを目的とした。質問紙調査で大学生296名の回答を得た。質問内容は、職務特性、職務有能感、内発的ワークモチベーションに関するものであった。調査の結果、職務の多様性や自律性が高いほど内発的ワークモチベーションも高くなること、職務有能感が高いほど内発的ワークモチベーションも高くなること、職務自律性に対応する職務有能感の低さが職務自律性と内発的ワークモチベーションの相関を強めることが示された。このことは、職務有能感を高めるだけでなく、仕事をより自律的にすることで職務有能感が低くても労働者が意欲的に働けることを示唆している。

自尊感情の高低・不安定性と被援助志向性の関連

—相談行動の利益・コストに着目して—

滝澤 茜里

本研究では、知覚された自尊感情の変動性尺度（P-SEI）を用いて自尊感情の高低・不安定性と被援助志向性の関連を検討するとともに、相談行動の利益・コストに着目して自尊感情や被援助志向性との関連を見た。自尊感情の高低・不安定性を独立変数、被援助志向性を従属変数とした重回帰分析の結果、被援助志向性に対する自尊感情の高低の主効果と高低×不安定性の交互作用が有意であった。また、自尊感情の高低・不安定性を独立変数、相談行動の各利益・コストを従属変数とした重回帰分析の結果、「否定的応答」に対しては不安定性の主効果が、「自己評価の低下」に対しては高低と不安定性の主効果と交互作用が、「問題の維持」に対しては不安定性の主効果と高低×不安定性の交互作用が、それぞれ有意であった。自尊感情の高低・不安定性によって相談行動の利益・コストが異なること、相談行動の利益・コストによって被援助志向性が異なることが示唆された。

男性の身体不満足感と摂食障害傾向の関連の検討

—他者評価期待と人格特性的自己効力感、家族の凝集性に注目して—

中川 泰成

本研究では特に男性に注目し、男女大学生を対象に摂食障害傾向の実態の報告ならびに摂食障害傾向に影響を与える変数およびその性差について検討を行うことを目的とした。まず性別による男性群（n=64）、女性群（n=83）への群分けののち、相関分析、Fisherの直接確率検定およびカイ二乗検定、重回帰分析を行った。その結果、男性における身体不満足感と自己効力感に負の相関関係、女性における摂食障害傾向と身体不満足感、家族の凝集性と他者評価期待に正の相関関係が見られた。それらから、摂食障害傾向の背景の心理的などらわれについて性差が存在する可能性が示された。また、男性の摂食障害の発症が身体への不満足感を前提としない可能性についても推測された。この点については、体形の理想を考慮したうえでの摂食障害関連変数の検討の必要があることが示唆された。

発達障害者に対して大学生が抱くイメージを探る

西本彩乃

本研究は大学生の発達障害者に対するイメージについて、発達障害者との接触経験や発達障害に関する知識、その他の質的側面に注目してその構造を明らかにすることを目的とした。大学生13名に半構造化面接による調査を実施し、語られた内容について分析を行った結果、11個のカテゴリーと8個の下位カテゴリーが生成された。従来から検討されてきた《発達障害の特徴に関する理解》《発達障害者に対する評価》《発達障害者に対する態度》の他に、大学生の《発達障害者に対する理念》《発達障害の有無を気にしない傾向》《発達障害の特性の強さには程度があるという認識》《適応的になることができるという考え方》《発達障害者に合わせた関わりをするという考え方》《発達障害者の障害に触れることに対する消極性》について検討可能性が見出されるなど、発達障害者に対するイメージについて先行研究では考えられてこなかった観点を提示した。

夢自我に対する異質性と自己類型の関連

東森茉衣子

異質性に着目した夢の捉え方と現代に特有な自己の関連は、現代青年の理解に重要であるが、検討されていない。本研究は、大学生と大学院生180名に対し、夢自我に対する異質性と自己類型の関連を調査した。まず、夢の異質性の様相把握のため、自由記述より「夢自我に対する違和感」因子と「夢自我に対する不快感」因子からなる尺度を作成し、信頼性と妥当性を検討した。次に、自己類型を多元的自己群（自己複数性と本来感が高い）、一元的自己群（自己複数性が低く本来感が高い）、自己拡散群（自己複数性が高く本来感が低い）とし、ストレスと夢自我に対する異質性との関連を検討した。その結果、自己拡散群が多元的自己群と一元的自己群よりもストレス得点が有意に高く、現代青年の自己のあり方は、自己複数性と本来感で捉えうることが示唆された。また、多元的自己群と自己拡散群が、一元的自己群よりも夢自我に対する不快感を覚えやすい有意な傾向がみられた。

対人関係感性について

—親の養育態度と感覚処理感受性に注目して—

山崎亜歌莉

本研究は、対人関係感性（IPS）、感覚処理感受性（SPS）、親の養育態度がどのように関連しているのかということと、どのような養育態度がIPSと関連が強いのかということについて検討した。大学生214名を対象に、IPS、SPS、親の養育態度について質問紙調査を行った。共分散構造分析の結果、SPSとIPSとの直接の関連と、過干渉的養育態度を介したSPSの間接効果が見られたが、養護を介したSPSの間接効果は見られなかった。また、重回帰分析の結果、IPSの合計得点は過干渉的養育態度との関連が強いことが分かった。これらの結果によって、児童期から青年期にかけては、親が自分に対して愛情深く受容的であるか、無関心あるいは拒絶的であるかということよりも、親が自身の自立性や主体性を認めてくれるかどうかということの方が、SPSとIPSとの関連において、あるいはIPSにとって、重要な役割を果たしている可能性があることが示唆された。

大学生におけるアイデンティティ形成過程と自伝的推論との関連

吉 田 楓

本研究は、大学生のアイデンティティ形成における過去の経験への意味づけ（自伝的推論）について検討した。コミットメント形成サイクル（人生の選択に向けて情報を集め、選択する過程）とコミットメント評価サイクル（選択の正しさを吟味し、自信を得る過程）を自伝的推論が部分的に媒介すると予想し、大学生114名を対象に質問紙調査を行った。共分散構造分析によるパス解析の結果、予想した媒介はみられなかった。しかし、広い探求および深い探求が自伝的推論に有意な正のパスを示し、また自伝的推論の転機因子を媒介した深い探求からコミットメント形成への間接効果が10%水準で有意傾向であった。従って、大学生が人生の選択に向けた情報収集や選択の吟味において過去の経験を意味づけていること、また選択の正しさを確かめていく際、過去の経験を意味づけることで、前提条件である選択それ自体をより強めている可能性が示された。

大学生の恋愛関係における心理的暴力加害と自己愛傾向の関連

—愛着不安を調整要因として—

渡 邊 彩 未

本研究は、大学生の恋愛関係における心理的な暴力加害について、愛着不安や自己愛傾向との関連を検討したものである。本研究では、自己愛傾向の評価過敏性・誇大性と恋愛パートナーへの心理的な暴力加害との関連性を、愛着不安が調整するという仮説を立てた。調査時点で恋愛パートナーのいた大学生を対象に質問紙調査を実施した。男性44名、女性88名の研究参加者のデータを、男女ごとで階層的重回帰分析を行った。その結果、愛着不安が高い大学生は、恋愛パートナーに対して心理的な暴力加害を行う傾向があることが示された。また、女性において、愛着不安が低い場合は、自己愛傾向の評価過敏性と恋愛パートナーへの心理的な暴力加害の関連がみられないが、愛着不安が高い場合は、評価過敏性の高さが恋愛パートナーへの心理的な暴力加害の高さを予測することが示唆された。